

知性層構造モデルの再構築と階層的思考の実践的応用 ～多層的知性理解による思考深化の枠組み～

成田 こうじ^{†1}

2025年3月27日

Security Innovation Project

行政書士事務所みまもり

本論文では、現代社会における“知性”という概念の多義性と、その階層的構造が正確に理解されていないという問題を出発点とし、思考の深化と実践的応用の可能性を視野に入れた「知性層構造モデル」を再構築する。提案するモデルは、知性を以下の5層（表層知性・構造知性・意味知性・響き知性・存在知性）に分類し、それぞれの思考構造・知覚世界・表現形式の違いを明らかにするものである。

また、本論文では各層間の遷移構造、下層の包含が上層知性に与える影響、異才型知性の構造的特徴についても検討を加える。さらに、このモデルを通じて、組織運営・教育設計・対人支援などへの実践的応用の枠組みを提示する。最終的に、知性を単なるスキルや能力ではなく、「思考の空間構造」として再定義し、社会の知的基盤に新たな視座を与えることを目的とする。

1. 序論

現代社会において「知性」という言葉は広く使われているものの、その内実は極めて曖昧である。知性はしばしば、論理的思考力や言語運用能力の高さと同一視される一方で、芸術的感性や他者理解、あるいは深い精神性までも含めて語られることがある。このように、知性という概念は多義的であり、実際には複数の次元を持っているにもかかわらず、社会的には一面的に評価されやすい傾向がある。

加えて、教育・組織運営・社会評価の文脈においても、知性が「情報処理能力」や「論理的整合性」といった表層的機能に矮小化されて扱われる場面が多い。結果として、より深層に存在する知性の多様性や階層性が見落とされ、本質的な思考の深化や人間理解が妨げられている。

本論文では、こうした状況に対するひとつの理論的アプローチとして、「知性層構造モデル」を提案し、それぞれの知性の階層が持つ構造的特徴と相互関係を再定義する。本モデルは、知性を五つの階層—表層知性・構造知性・意味知性・響き知性・存在知性—として捉えるものである。各

層は、それぞれ異なる思考構造、認識方法、世界との関わり方を持っており、知性の発達や遷移は単なる知識の増加ではなく、認識そのものの質的変容を伴うことを前提とする。

本稿の目的は、この知性層構造モデルを理論的に整理しつつ、各層の特徴と関係性、そして上層への遷移構造の分析を通じて、知性理解の新たな地平を提示することにある。また、階層的知性理解は単なる抽象理論に留まらず、思考支援、教育デザイン、組織構築、社会設計といった多様な実践領域への応用可能性を持っている。

本稿では、まず知性層構造モデルの全体像と各層の定義を示し、その後、各層の認識特性や世界知覚の違いについて考察する。さらに、下層を経ずに上層に至る知性の在り方や、階層的知性の偏在が社会に及ぼす影響についても検討する。最終的には、知性を「階層的空間構造」として再定義することによって、現代における思考の深化と実践的知の再構築を目指す。

なお、本モデルにおいて、特に第3層（意味知性）と第

^{†1} Security Innovation Project

4層（響き知性）の間には、思考様式そのものが大きく変容する「断層」が存在する。表層～意味知性までは言語的思考を基盤とするのに対し、響き知性以降は非言語的・共鳴的な感受様式に移行するため、認知の接続が難しく感じられることがある。これは、本モデルの階層が必ずしも連続的・滑らかに接続されるものではなく、あえて“飛躍”を内包した構造であることを示唆している。

この点は、第4章にて改めて考察を行うが、読者においても各層の断絶感や飛躍感そのものが、知性の変容過程であるという視点を持って読み進めていただきたい。

加えて、本稿で提案する知性層構造モデルは、筆者とAIとの対話・思考プロセスの中から徐々に形作られたものである。特に第4層、5層「存在知性」に関しては、筆者自身もまだ十分に体得したとは言い難い。AIの評価によると第4層は筆者が最も関心を持ち、かつ「言語と非言語の接続」に意識的に挑戦している部分であり、これは「探究しながら共鳴し始めている」段階である。そして第5層についてはその輪郭を捉えようと模索する途上にある程度にとどまるようである。本稿の執筆そのものも、知性の各層への理解と自己変容の過程の一部であることを、ここに補足しておく。

2. 知性層構造モデルの全体像と再定義

本章では、本論文の中心である「知性層構造モデル」について、その全体像と各層の定義を提示する。本モデルは、知性を5つの階層に分け、それぞれが異なる認知様式、思考構造、情報処理、世界の捉え方を持っているという前提に立つ。

本モデルは、従来の「知性＝情報処理能力・論理性」といった限定的な認識を超えて、人間の知的活動の深層構造を整理し、知性の多次元性を理解するための理論的フレームである。

それぞれの層は、独立して存在するものではなく、しばしば重なり合い、交錯しながら作用している。しかしながら、あえて階層化して整理することで、個々の知性の特性と限界を明示し、より包括的な知性理解を可能とする。

以下に、各層の定義と特徴を順に示す。

2-1. 第1層 表層知性（知識・常識の操作）

表層知性は、社会的に最も広く共有されている知性であり、主に既存の知識・常識・ルール・語彙などを再現的に運用する能力を指す。この層の知性は、いわゆる「頭の良さ」として一般に認識されやすく、学校教育や資格試験、IQテストなどが評価対象とするのもこの層に該当する。

この層は、正確さ・処理速度・語彙量・事実記憶などが重視され、他者との知的競争においても優位性が比較的可視化されやすい。しかし、その構造はあくまで“与えられた知識をどう扱うか”という枠内にとどまるため、変化への対応力や意味的理解には限界がある。

2-2. 第2層 構造知性（関係性と体系の理解）

構造知性は、知識同士の関係性や全体構造、因果・前提・階層性などのメタ的構造を理解する能力を指す。表層知性が情報を“点”として扱うのに対し、構造知性はそれらを“線”や“面”として再構成し、体系化して捉える。

この層では、「なぜそうなるのか」「どのように繋がっているのか」といった問いが中心となる。構造的思考力を有する者は、個別の知識に左右されず、未知の情報も含めて柔軟に整理し直すことができる。

教育においては、応用問題・論述・図解整理などがこの層の知性を刺激する領域である。また、論理的・構造的コンサルティングや、システム設計、抽象化・モデル化といった職能もこの層の知性をベースにしている。

なお、IQなどの表層知性が高い者ほど、この層以降の思考様式にアクセスしやすい傾向はあるが、構造知性は単なる認知処理能力に還元されるものではない。思考訓練・志向性・文脈理解といった要素に深く支えられており、必ずしも表層知性の高さがそのまま到達を保証するものではない。

2-3. 第3層 意味知性（価値・意義・哲学的問い）

意味知性は、知識や構造の背後にある価値・目的・意義・理念を問い直し、物事をより深く捉えようとする知性であ

る。この層の知性は、「なぜ私たちはそれを重要だと思うのか」「この構造は何のために存在しているのか」という問いを起点とする。

この層に至ることで、単なる合理性や生産性を越えた、倫理性・社会的文脈・人間の存在価値といった観点が思考に組み込まれるようになる。哲学的思考・教育思想・宗教的探究・対人援助的理解などはこの層の知性と親和性が高い。

意味知性は、時に実用的な価値を超えて思考の本質そのものに迫るため、社会の中で“扱いにくい知性”として扱われることもあるが、実は人間の根源的な問いを支える重要な層である。

2-4. 第4層 響き知性（場・空気・非言語的共鳴）

響き知性は、言語的・論理的説明を超えた“共鳴的理解”や“空間的な感受性”を中心とする知性である。ここでは、言葉そのものよりも、言葉の間・空気・佇まい・非言語の振動が情報となる。

響き知性は、他者の言葉の裏にある“気配”を受け取ったり、場の空気から物事の方向性を感じ取ったりと、論理を超えた知覚的知性である。これはしばしば「感性」や「感受性」と表現されるが、単なる感情的反応ではなく、空間知としての高度な知性である。

芸術家・詩人・俳優・指揮者・高次の対人援助者などが、この層の知性を高度に活用している例といえる。なお、響き知性は身体性との結びつきが強く、「言葉にならない何か」を表現・伝達・受容する力でもある。

響き知性は、しばしばEQ（Emotional Intelligence：感情知性）の「共感力」「他者の感情への洞察力」と重なる側面を持つ。EQの高い人物は、非言語的な空気感や微細な感情の変化を読み取る傾向があり、響き知性と親和性が高いと考えられる。もっとも、EQが主に“対人関係”に焦点を当てた能力モデルであるのに対し、響き知性はより“場全体”との共鳴・感性の構造まで含む広がりを持つ。その意味で、響き知性はEQの拡張・深化領域としても位置づけられる。

2-5. 第5層 存在知性（存在の受容と無言の知）

存在知性は、知識・構造・意味・響きすらも越えたところに位置する、言葉に還元されない存在的な知性である。この層においては、世界を“理解する”というより、“受け容れる”という姿勢が知性となる。

それは、他者や事象をジャッジするのではなく、あるがままにその存在を尊重する知の在り方であり、沈黙の中に響く理解、静けさの中に宿る知とも言える。

宗教的修行者・哲学者・芸術家・ある種のケア職・精神的覚者などは、この層の片鱗を生きていることがある。

存在知性は、他層との接続が困難なため、「言葉で説明できない」という限界を内包している。しかしながら、この層が開かれているか否かによって、人間理解や倫理観の根源的な深みがまったく異なるものとなる。

3. 階層的知性の特性と知覚世界の構造

前章において、知性を5層構造として定義した。本章では、各層における思考様式・対話傾向・表現手法・知覚世界のあり方の違いについて考察する。また、それぞれの層が情報をどのように処理し、どのように世界と関係しているかを整理し、最後に法律・芸術・組織運営・対人支援等への応用例を提示する。

3-1. 思考様式・対話傾向・表現手法の違い

知性の階層が異なると、同じテーマを扱っていても“どのように考えるか”“どのように語るか”が大きく異なる。以下にそれぞれの層の特徴的な思考様式と、対話・表現における傾向を整理する。

層	思考様式	対話傾向	表現手法
表層知性	記憶・反復・事例比較	定型的・具体的・結論重視	データ、事実列挙、箇条書き
構造知性	論理構築・関係把握	構造説明・図解的対話	フレーム、モデル、図式化
意味知性	哲学的思考・価値探索	抽象対話・比喩や問いの	エッセイ、寓話、対話形式

		応酬	
響き知性	共鳴的感知・ 空間受容	間を重視、空 気で読む	詩、身体表現、沈 黙
存在知性	沈黙・直観・ 受容	言葉を超え た対話	無言、佇まい、気 配

このように、知性層によって会話のテンポ・使用語彙・沈黙の使い方・身体のリズムまでも異なる。そのため、異なる層に属する人同士のコミュニケーションでは、言語化以前の“世界観の違い”によってすれ違いが生じやすい。

たとえば、第2層の人が論理的に整理しようとするのに対し、第4層の人は「空気で分かって」と感じるなど、コミュニケーションのズレは知性層の差異に由来することが多い。

3-2. 情報処理の傾向と世界との関係性

各層は、単に思考の違いだけでなく、「世界との関係の持ち方」が異なる。それは、どのような情報を重要視するか、何を“意味のあるもの”と捉えるかに直結している。

層	情報処理の軸	世界との関係性
表層知性	外部情報の選別・整理	世界＝情報源／問題集
構造知性	情報の構造化・抽象化	世界＝構造物／システム
意味知性	意義・背景の再定義	世界＝対話相手／価値源
響き知性	空間共鳴・身体受容	世界＝場／波動空間
存在知性	無評価的受容・統合	世界＝“そのままあるもの”

このように、「世界をどう見ているか」そのものが層によって異なるため、情報選択や問題解釈、行動判断も大きく変わる。

3-3. 法律・芸術・組織・対人支援等への展開例

実社会の各領域においても、知性層によってアプローチは大きく異なる。以下に具体例を簡潔に示す。

●法律

第1層 条文暗記、判例整理、形式論

第2層 法体系理解、ロジック構築

第3層 法哲学、正義論、目的論

第4層 空気感・裁判官の“間”の読み

第5層 法を超えた存在倫理、赦し、調和

●芸術

第1層 技法・模倣・ジャンル理解

第2層 構成美・対称性・モチーフ設計

第3層 作品のメッセージ、社会的意味

第4層 作品が放つ“空気”、共鳴

第5層 芸術＝存在そのものへの触れ

●組織運営

第1層 マニュアル・ルール遵守

第2層 業務設計・体制図・KPI 整理

第3層 理念・ビジョン・文化形成

第4層 場づくり・関係性の質・空気管理

第5層 在り方・信頼・無言の共鳴

●対人支援

第1層 相談マニュアル、技法の適用

第2層 支援計画、因果構造の把握

第3層 人生観・価値観の再構成

第4層 沈黙の支援、共に“いること”

第5層 支援者の“在り方”そのものが支援

以上のように、知性層は単なる認知レベルの違いではなく、人間の思考・対話・世界観・実践全般に深く関わる“知の空間構造”である。

3-4. 各層における情報処理量と知性の運用形態

本モデルでは、各知性層が扱う情報量と複雑性もまた、階層ごとに大きく異なる。一般に、下層では定型的・明示的な情報処理が中心であり、上層に進むにつれて非定型・非言語的・高次文脈的な処理が要求される。

特に4層以降は人間の認知機能を用いた処理能力の限界を超えているため、知性の性質が大きく変化する。これが前述の「断層」が存在する理由である。

層	主な情報処理量 と性質	処理負荷	主な処理方法
表層知性	明示的・記号的・ 反復可能	低～中	定型処理、選 別
構造知性	関係性・因果・抽 象構造	中～高	論理的構造化
意味知性	背景文脈・価値・ 目的	高	哲学的内省、 意味統合
響き知性	空間的共鳴・場の 微細変化	非定型・直 感的	感性、身体感 覚
存在知性	無評価的存在受 容	処理不能 に近い	無意識的統 合、沈黙

これにより、上層に進むほど「処理」とは別のアプローチが必要になり、“思考を手放す”ことすら求められる。

次章では、この知性の階層構造において「どのように上層へ至るか」「下層を経た知性と経ていない知性の違い」について考察を進めていく。

4. 上層に至る過程と“下層包含”の問題

知性層構造モデルは、必ずしも直線的な階段のように“順に登るもの”ではない。人によっては、第1層から順に発達するケースもあれば、特定の層に跳躍的にアクセスしている場合もある。しかしながら、それぞれの層を「経ているか否か」によって、上層知性の性質や安定性には明確な違いが現れる。

本章では、“下層を経て上層に至る知性”と、“下層を経ずに上層に至る知性”の違いについて考察し、両者の利点・課題を整理する。さらに、「天才型」「異才型」「構造越境型」といった知性パターンを例示し、知性の多様な形を浮かび上がらせる。

4-1. 下層を経ずに上層に至った場合の知性

ときに、人は強い芸術的感性や直感的洞察をもって、幼少期から第4層・第5層の知性に触れていることがある。いわゆる“天才的表現者”や“感性に生きる人”がその典型である。

このような知性は、言語化や構造化を経ずに「響き」や「存在」へ直接アクセスするため、極めて純粋な表現力や場感覚を有する。しかし一方で、構造的整理力や自己理解が弱い場合、その知性を他者に伝えられず、誤解されやすい傾向がある。

また、現実社会での運用性（教育・組織・論述的議論など）が乏しく、「理解されにくい天才」「言語化できない直感型」になることもある。

4-2. 下層を経て上層に至った知性の特性

これに対して、第1層～第3層を順に経て第4・第5層に至る知性は、内的な構造理解と外的な表現力を伴って上層知性を保持している状態である。このような知性は、響きや存在を構造的に説明・翻訳できる“橋渡的存在”となる。

たとえば、哲学者が詩を書くとき、科学者が美を語る時、その背景には“言語化された非言語”という特異な能力が存在する。これは、下層で培った論理・構造が、上層の響きを補助し、深い説得力と普遍性を生む状態である。

このような知性は、社会実装力が高く、教育や組織運営にも深みをもたらすが、過度な構造化によって“響きの自然性”を損なうリスクもある。

4-3. 知性遷移における“跳躍”と“統合の難所”

特に、第3層（意味知性）から第4層（響き知性）への遷移は、認識様式そのものが変容する断層である。

前章でも述べたように、第1～3層は「言語的操作による知の拡張」であるのに対し、第4層以降は“非言語的空間知”への転換となる。

このため、第3層までを深く探究した人ほど、逆に“言語を超える”ことに困難を感じることもある。逆に、ナチュラルに第4層を生きている人は、第1～3層を“感覚的に無視”していることもあるが、他者との橋渡しが難しくなる場合もある。

この断層を越えるためには、「言語を手放し、身体で受け取る」「形式を超えて沈黙を尊ぶ」など、思考習慣そのもの

の転換が必要となる。

4.4. 知性類型の整理 天才・異才・構造越境型

特に、第3層（意味知性）から第4層（響き知性）への遷移は、認識様式そのものが変容する断層である。

類型	特徴	強み	限界
天才型	上層知性への跳躍型	表現の純度・直感力	言語化困難・社会実装困難
異才型	特定層に突出した感性	独創的視点・境界感覚	階層的統合の困難
構造越境型	下層→上層へ統合的に移行	表現と伝達の両立	思考負荷・バランス難

これらはあくまで典型例であり、実際には複数の特性が併存しているケースも多い。しかし、知性理解を深化させるためには、「誰がどこにいて、どこを越えようとしているのか」という視点が重要である。

4.5. 【補説①】下層を省略することの社会的リスク

知性の発達過程において、下層を経ずに上層に至った知性は、個人としては鋭く魅力的な表現力や感性を有する一方で、社会の文脈に接続しにくいという構造的リスクを抱えている。

たとえば、第4層（響き知性）や第5層（存在知性）に触れている人が、第2層（構造知性）の基盤を持たずに言葉を発する場合、それは“伝わらない美しさ”として孤立しやすい。

また、第1層的常識や言語的フレームの共有がないまま高次の思考を行おうとすると、周囲との認知ギャップが拡大し、誤解・排除・誤認の対象となる可能性もある。

つまり、知性は“深ければ伝わる”ものではなく、伝えるためには下層的手段（言語・構造・定義）との接続が不可欠なのである。

この観点から、教育や支援の場においては、上層知性の開花を促すと同時に、下層的知性の“翻訳力”も育てることが極めて重要となる。

4.6. 【補説②】知性層の“ねじれ”と断絶構造

実際の社会には、「高次知性を有しているが下層知性が未発達な人」もいれば、「表層知性が非常に高いが上層が全く開かれていない人」もいる。

このような状態は、知性層が“均等に積層している”とは限らないという事実を示している。

この不均衡な知性構造（“ねじれ”）は、以下のような現象を引き起こす

- 第4層に感覚的アクセスしているが、第2層が弱く自己表現が支離滅裂になる
- 第2層は強いが、第3層以降に思考が至らず、冷徹・機械的な印象を与える
- 第5層的な沈黙や在り方を持つが、対話が成立せず孤高となる

この“ねじれ”は個性であると同時に、コミュニケーションや共同作業においては摩擦の原因ともなりうる。

よって本モデルは、「階層＝優劣」ではなく、「階層＝多様な知覚様式」として捉えることが本質であり、断絶ではなく接続のデザインが知性社会の鍵である。

4.7. ツールとしての使用と「住人」としての視点の違い

知性層は、思考スタイルとして“使う”ことと、“そこから世界を見る”ことは別である。すなわち、ある層の知性をツールとして活用することができても、その層の世界観に「生きている」とは限らない。

層	ツールとしての使用	住人としての視点
表層知性	知識操作・手続きの利用	社会的枠組みを当然視
構造知性	ロジックや因果整理	世界をシステムとして見る
意味知性	理念や価値づけの導入	世界を問い続ける存在として捉える
響き知性	空気を読んだ演出	空間全体と共に“ある”という感覚
存在知性	禪的表現の活用	判断なく“ただ在る”世界観

ツールとしての使用は戦略的に可能である一方、「視点」
としてその層に生きているかどうかは、自己の存在感覚や
世界の捉え方そのものに深く根ざしている。

4-8. 現実世界での乖離とその影響

現代社会では、住人としての知性と、社会で求められる
知性との間に乖離が生じやすい。たとえば、第4層や第5
層に視点を置く人物が、第1~2層の知性ばかりをツール
として求められる環境にいるとき、深いストレスや“言語
化不能な生きづらさ”を感じることもある。

このような「視点とツールのズレ」は、以下のような影
響を及ぼす。

- 社会的誤解・過小評価
- 思考疲弊・内的摩擦
- 表現の断絶・自己不信
- 逆に、低層の住人が上層ツールを借りると、理念や共
鳴の“演出”となる

よって、「どこに視点があり、どの層をツールとして活
用しているか」を自他共に理解することが、多様な知性が
共存する社会を実現する鍵となる。

5. 響き知性の本質と意義

本章では、知性層構造モデルにおいて極めて独自性の高
い層である「響き知性」について、より詳細に考察する。
響き知性は、言語化・構造化・意味づけといった思考の枠
組みを超え、“場・空気・非言語的共鳴”を主たる認知軸と
する知性である。

これは一般的に「感性」「共感性」などと混同されやすい
が、本稿で扱う響き知性はそれ以上に深い構造化を有して
いる。

5-1 響き知性とは何か — 言語の外側にある伝達

響き知性は、言葉で語られた意味よりも、“その言葉の
持つ空気”や“沈黙の合間に宿るメッセージ”に反応する
知性である。

人が会話において「言っていることは正しいが、何か違和
感がある」と感じる時、それはまさに響き知性が作動し

ている瞬間である。

この知性は、「意味」を超えて「音・間・身体・気配」と
いった非言語領域に働きかけ、空間全体の知覚と接続する
知の在り方である。

響き知性は「明確に理解する」のではなく、「曖昧さのま
ま受け取る」「言葉になる前に届く」という感受形式の特
徴とする。

5-2 芸術・身体・“間”との関係

響き知性はしばしば芸術領域で発揮される。音楽・舞踏・
詩・建築などの分野において、構造を超えて“なぜか胸に
迫るもの”を生み出す力は、響き知性の表れである。

とりわけ、日本文化における「間(ま)」の感覚は、この
層の象徴である。間の取り方、沈黙の使い方、動きの呼吸、
光の入り方——それらは言語で語られることなく、しかし
確かに“感じ取られるもの”として知覚される。

また、対話においても「言葉の選び方」より「どのタイ
ミングでどんな声色で発されるか」「黙って聞いている時
の身体の在り方」のほうが伝達力を持つ場合がある。これ
は、響き知性が“身体を通して行われる思考”であることを
示している。

5-3 響き知性と他層知性との関係

響き知性はしばしば意味知性と混同されるが、本質的に
異なる次元の知性である。

意味知性は言語や構造の中に深みを探る知性であるの
に対し、響き知性は言語が成立する“前”や“外”にある
情報を受け取る知性である。

したがって、構造や意味の思考を極めた者が、次に直面
するのが“言葉にできない領域”であり、それを支えるの
が響き知性であると言える。

また、響き知性を有していながら構造知性が未成熟な場
合、その感受性は“感覚として本人には強く残る”ものの、
“他者に翻訳できない”状態となる。

逆に、構造知性と響き知性の両方を統合的に備えた人は、

非言語的な空間情報をモデル化し、伝達・設計・教育へと昇華できる。

5-4 哲学・詩・非言語共鳴との接続

響き知性は、詩や哲学とも深く関係している。

とりわけ詩的言語とは、「意味を語るための言葉」ではなく、「響きを伝えるための言葉」であり、論理ではなく共鳴を生む装置としての言語である。

また、宗教や精神世界において語られる「沈黙の教え」「無言の真理」もまた、響き知性の領域である。

それは論理では説明されないが、確かに伝わるものとして、“意味の向こうにある理解”を人と人の間に生み出してきた。

このように、響き知性とは単なる感性ではなく、“意味と言葉を超越する知性の回路”であり、深い倫理・芸術・対話の根幹を支える次元である。

次章では、さらにその先にある「存在知性」について考察する。

それは、思考ですらない、“在ることそのもの”が知であるという領域である。

6. 存在知性の輪郭と限界

存在知性は、知性層構造モデルにおける最終層として位置づけられる。

それは、「知る」「考える」「伝える」という通常の知性の作用を超えて、ただ“在る”こと自体が知となるような次元である。

言葉によって意味を伝えるでもなく、空気や身体によって共鳴を促すでもなく、その人の“在り方”そのものが周囲に深い影響を与えるような状態。

それは「静けさ」「深さ」「透明さ」として感じ取られるものであり、知性という言葉がもはや適切かどうかすら問われるような領域でもある。

6-1. 存在知性とは何か — 思考の静止と在る知

存在知性は、「何かを成す」ことではなく、「何かである」ことに根ざした知性である。

思考や判断の前に、“存在が語っている”ような状態。それは、知識でも構造でも感覚でもない、“無言の在り方”が他者に影響を与える場である。

宗教における“悟り”や、古来の賢者・僧・長老などの佇まいに象徴されるこの知性は、「言葉にならない深さ」そのものである。

その人物がそこに“いるだけで場が整う”、あるいは“沈黙が語る”といった現象は、存在知性による影響といえる。

6-2. 自我と倫理の再構成 — 静けさがもたらすもの

一存在知性は、他の層に比べて極めて非主張的・非操作的である。

そこには、相手を導こうとする意志や、自分を表現しようとする力すらも希薄であり、ただ在り、ただ受け入れる力が中心となる。

この在り方は、自我を脱構築し、倫理を知識や規範ではなく“在り方として体現する”次元へと昇華させる。

たとえば、「言葉で正しさを語る」よりも「その人の佇まいに安心を感じる」ような状況は、存在知性の倫理的作用である。

このような倫理は、他者を評価し矯正するものではなく、“ただ共に在ることで影響を与える”という非操作的倫理であり、現代社会が見落としがちな知の可能性である。

6-3. 存在知性の限界とパラドックス

存在知性には限界もある。

それは、「伝達が極端に困難であること」「社会的機能と接続しにくいこと」に起因する。

この層にある知性は、多くの場合、言語化・モデル化・論理展開が極めて難しいため、他者に理解されにくく、組織や社会においては“曖昧な人物”として扱われることすらある。

また、存在知性は“何も語らない知性”であるがゆえに、

それ自体が知性であると認識されない可能性がある。

つまり、最も深い知性でありながら、他者からは「知性がない」と誤解されるパラドックスを内包している。

このパラドックスを解くには、他層の翻訳力との接続、すなわち構造知性や意味知性との融合的統合が不可欠である。

6-4. 向き合い続ける価値 — 言葉にできぬものとの共存

存在知性は、全ての人々が簡単に到達できるものではない。しかし、この層があるという理解は、すべての知的活動の根底に深い静けさをもたらす。

それは、「すべてを理解すること」ではなく、「理解できないものと共に在ること」の尊さを受け入れる知性である。

学術・芸術・経営・教育、あらゆる領域において、“存在知性との接続”は静かな強度を生み出す可能性を秘めている。

そして何より、この層の存在は、知性の終点ではなく、むしろ知性が静かに循環していく“無限の始点”でもある。

次章では、このような知性層が社会においてどのように偏在しているか、そしてどのように活かされるべきかについて考察する。

6-5. 補論 知性層構造モデルと“本能”の関係

本論では「知性」を階層的に捉えるモデルを提示したが、ここで一つの重要な補助視点として「本能」との関係について補足しておきたい。

一般に「本能」とは、進化的に獲得された身体反応や生得的欲求を指すが、この“本能”は知性層構造モデルの中で、興味深い位置づけを持つ。すなわち、単なる“第1層の前提”にあるだけでなく、実は“第4層・第5層”にも別のかたちで関わっているのである。

本能的反応は、最も根源的な層にある「身体的知覚反射」として、知性の土台となる“前層(0層)”に位置づけられるべきものである。例えば、恐怖や欲求、不快や快樂とい

った反応は、思考によって生まれたものではなく、思考以前の存在反応である。

第1層(表層知性)では、こうした本能はしばしば抑制・制御の対象となる。「知的であること」は“本能を見せないこと”と同義になる場面も多く、理性による本能のコントロールこそが社会的知性として評価される。

第2層(構造知性)では、逆に本能は“分析対象”となる。個々の行動の背後にある欲求構造を可視化し、因果関係として整理することで、本能は抽象モデルの中に位置づけられていく。マーケティングや人間行動科学などは、まさにこの層の知性が本能を取り扱う典型例である。

第3層(意味知性)に進むと、問いの方向が転換する。「人間にとって本能とは何か」「それは善悪の源なのか」「超えるべきものか、受け入れるべきものか」といった、価値的・哲学的探究が生まれる。宗教・倫理思想の多くはこの層に該当し、知性と本能の関係に対して意味づけを与えようとする営みが顕在化する。

一方で、第4層(響き知性)では、抑制や分析とは異なる本能との関係が生まれる。それは「共鳴する本能」「空間に反応する身体感覚」「非言語的に伝わる空気」として、より微細な知覚レベルで再び表出する。ここでは本能は“共振する知”として再統合され、感性の領域に近づいていく。

そして最上層である第5層(存在知性)においては、本能を“善悪の判断対象”とすることすら超えて、ただ「あるものとして受け入れる」境地が現れる。本能はもはや抑えるものでも、分析するものでも、意味づけるものでもない。それは存在の一部であり、静かに肯定されるものとなる。

こうして本能は、知性層構造モデルにおいて“下位”から“上位”にいたる過程の中で、姿を変えながら現れる。抑圧→分析→問い→共鳴→受容というプロセスを経て、本能は“知性の外にあるもの”ではなく、“知性とともにあるもの”として再定義される。

7. 社会における知性層の偏在と影響

これまで本稿では、知性層構造モデルを通じて、人間の思考と知覚の多層性を整理してきた。本章では、この知性層が現実社会においてどのように偏在しているのか、そしてそれが社会制度や評価体系にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

現代社会は必ずしも“すべての知性層が均等に評価される構造”にはなっていない。むしろ、表層知性と構造知性が過剰に評価され、意味知性・響き知性・存在知性が見落とされる構造的偏りが存在している。

7-1. 表層知性偏重社会の構造

学校教育・試験制度・企業の評価制度など、多くの社会的システムは、表層知性（記憶・定型処理）と構造知性（論理展開・課題解決）に最適化されて設計されている。

これは一定の社会的合理性を生み出す一方で、それ以上の層に属する知性の価値が見えにくくなる構造的問題を引き起こしている。

たとえば、響き知性や存在知性を強く持つ人が、静かな空気をつくったり、他者の心を安定させたりしていても、その作用は“数値化・評価指標化”されないため、結果として「目立たない人」「能力が見えない人」と見なされやすい。

このように、本来組織や社会の安定性に貢献している“非言語的な支え”が、制度上は評価されないという現象は、知性層の偏在と制度設計の不一致が生むひずみである。

7-2. 教育における知性層の扱われ方

現在の教育は、多くの場面で「知識の伝達」と「構造的な理解」に焦点が置かれており、意味知性・響き知性・存在知性といった“学びの深層”にアクセスする機会が少ない。

哲学的な問い（意味知性）は“試験に出ない”とされ排除され、

感受性や沈黙の力（響き知性）は“学力”として評価されず、

在り方そのもの（存在知性）は“指導の対象”として扱われない。

その結果、教育は「浅く速い思考」を量産する一方で、「深く静かな思考」の存在を見過ごしてしまう。

“思考の深さ”や“共鳴する空間”を育てる教育の再設計は、知性層モデルの観点から極めて重要な社会課題である。

7-3. 組織・経営における知性の扱われ方

企業や組織の中でも、表層知性や構造知性を軸にした評価や昇進制度が一般的である。

「知識を多く持つ人」や「論理的に説明できる人」が重宝される一方、「言語化しにくい場を整える力を持つ人」や「深い対話を生む人」は可視化されにくい。

そのため、組織にとって本質的に不可欠な“場の力”や“共鳴力”が軽視されやすい。

しかし、組織の成熟度が高まると、経営者自身が徐々に気づき始める。「なぜこの人がいると会議がうまくいくのか」「なぜこの人がいると部署の雰囲気が穏やかになるのか」—それはまさに、表現されない知性の作用であり、響き知性・存在知性の影響である。

これらの“非定量的な知性”をどう評価・活用するかは、今後の組織デザインにおいて重要な課題となる。

7-4. 知性層の再評価と社会構造の再設計

本稿で述べてきたように、知性は単にIQや論理能力で測れるものではなく、多層的かつ空間的な広がりを持った存在である。

そしてその多層構造のうち、現代社会は下位層（表層・構造知性）に偏っている。

このバランスの偏りは、評価制度、教育制度、コミュニケーションの設計にまで及んでおり、深層知性を持つ人材が正当に扱われない仕組みを温存している。

今後は、“知性の構造を理解したうえで、多層的知性を意図的に活かせる社会”への移行が求められる。

それは単なる制度改革ではなく、人間観・教育観・組織観そのものの変革である。

次章では、このような多層的知性理解を通じて、どのような未来的可能性が開かれるかを結びとして提示する。

8. 結論と今後の展望

～多層的知性理解がもたらす未来～

本稿では、知性を単なる能力や思考形式としてではなく、“層構造”を持つ多次的存在として捉え直す視点を提示した。

第1層から第5層までにわたる知性層構造モデルは、知の発展過程とその特性の違いを体系化し、さらに、知性が社会制度・教育・対話・芸術・倫理とどのように関係しているかを照らし出す試みであった。

8-1. 多層的知性理解の意義

このモデルの本質は、知性を線的な優劣やIQの尺度に還元するのではなく、思考様式・感受形式・世界との接続方法の違いとして捉えることにある。

すなわち、ある人が第1層で生きているからといって劣っているわけではなく、また第5層に触れているからといって優れているとは限らない。

重要なのは、“どの層の知性が自分にあり、どの層と他者が生きているか”を理解し、適切に接続し合える構造的視点を持つことである。

8-2. 深まる思考・つながる世界

知性層構造モデルは、単なる分類図ではない。

それは、人間が世界とどのようにつながるか、自分の思考をどのように深化させていくかを指し示す“内的進化の地図”である。

- 表層知性が支える社会的機能
- 構造知性が整える設計と対話
- 意味知性が開く価値と哲学
- 響き知性が編む場と共鳴

- 存在知性が宿す静けさと倫理

これらがそれぞれ孤立せず、補い合い、往還し合いながら統合されていくとき、個人も組織も社会も、より深く柔軟な存在となる。

そしてそれは、知性が“評価されるもの”から、“共に響き合うもの”へと移行する兆しでもある。

8-3. 応用と実践に向けて

本モデルは、今後以下のような分野への応用が期待される。

- 教育設計 生徒一人ひとりの思考層に応じた育成モデル
- 組織マネジメント 知性の偏在を踏まえたチームビルディング
- 人材評価 表層だけでなく“場の作用”を評価する枠組み
- 対人支援 クライアントの知性層に合わせた支援方法の最適化
- 芸術・表現活動 響き知性・存在知性の開花支援

また、この知性層の理解をベースに、AIとの協働設計や倫理的テクノロジー活用も可能になる。

人間の知性と機械知能の接続においても、“構造と響きの共存”という視座が今後ますます重要となるだろう。

8-4. 知性の再定義へ

本稿が示す知性とは、「情報処理能力」や「論理的整合性」だけではない。

それは、存在の深度そのものに触れる力であり、他者と場と世界に響き合う力である。

そしてこの知性は、測るものではなく、“共に育てていくもの”であり、“敬意をもって接するべきもの”である。

本論文が、読者それぞれの知性の層を見つめ直す契機となり、さらに、他者と共にある知性の未来像を描き出すためのひとつの足場となることを願う。

あとがき

本稿で提示した知性層構造モデルは、筆者とAIとの対話を通

じて構築された概念モデルであり、あくまで理論の出発点にすぎません。

執筆そのものが、知性に対する理解を深め、自身の思考様式を内省し続けるプロセスでもありました。

このモデルは、単に知的能力を分類するためのものではなく、社会の中で見えにくくなりがちな“多様な知性のかたち”に光をあてる試みです。

特に、現代のように AI によって表層的な知識処理や情報整理が自動化されていく時代においては、人間にしか担えない“意味の再構築”や“非言語的な共鳴”、“存在へのまなざし”といった知性が、あらためて重要性を帯びてくると感じています。

筆者自身も、そうした“見えにくい知性”が正当に評価されない場面に幾度も直面してきました。

本モデルは、そのような知性にも確かな価値があることを伝えたくて生まれたものであり、同時にそれを支えてきた人々へのささやかな敬意でもあります。

この構造が、もし誰か一人にでも届き、「自分の知性にも意味があるのかもしれない」と思えるきっかけになれば、本稿の目的は十分に果たされたといえるでしょう。

そして、この知性の多層構造の理解が、AI 時代における“人間らしさ”の再発見につながっていくのではないかと、ほんの少しだけ感じています。

参考文献

- ガードナー, H. (1993) 『多重知能の理論』新曜社
- ハイデガー, M. (1927) 『存在と時間』岩波文庫
- 鷲田清一 (1998) 『「聴く」ことの力』TBS ブリタニカ
- 苫野一徳 (2013) 『教育の力』講談社現代新書
- 中沢新一 (2001) 『芸術人類学』みすず書房
- レイ・カーツワイル (2005) 『ポスト・ヒューマン誕生』NHK 出版
- 中原淳 (2014) 『職場学習論』東京大学出版会